

繪入

山栞古史

三

~ 13  
3297  
3





門へ13  
3297  
3  
新巻

山樵太夫榮枯物語卷之三

江東 梅暮里 谷我補編

大正八年八月九日  
本大學出版部  
贈

第十一

柵父狐跡之地を避窮居を

とて睦月の方へ磐木家騒動より宇和竹子養ひられしをかくるも  
かた別と成はし獲祖の木を離れ飛鳥の翅を鍛えしれごとく何地  
へ便れべくも形は涙眼空しく過われもかくては雨子の為不慮なり形を  
安壽時那狐誘ひ都志王丸の身成携へ流石母と流を配し馴れし  
ふれ嶮岨岩壁いとひなぐ何方か當との定めなく或は蕭條たる  
舊の社小一夜をのりし神鏡曇りて照しむらと古木と朽く夜照し異  
つらばと措疑らるるもは根もけとて困眠と又と廢寺の荒涼たるに  
巖雨を凌と蔓草と壞壁もけしひと枯のころ蜘蛛の顔をかかふる

山樵太夫卷之三

十一



左右へ拭ひ骨火此所こゝに焼やとば彼所あそこに消くせと云いふ更さらもあづきあづきのく嚼く先せん  
 小甕こづき生なのかりひみみななと間もあらないから悲しまいと食くとべたまのとて木の実  
 茅かやの実もまよくに残とれと食し此と情の飯を滑龍りゅう陀だ母はも坊とべく  
 飢うれ凌と露の命とけるたん訓が鳥獸の声えも追人のやと驚おど  
 うらぬ日とてめあらず。兩りやう子しの顔もこのみけめといと疲つかれは猛まう心しんの張弓の  
 撓たふとて假かり令しやう猛まう獸の餌え食となれと一足も前まれどと童と倒とめれが  
 友とも子しとありて左ひだり右みぎも絶て安壽あしう姫ひめハ羊増しやうわれいと悲しく此こ聖せい中ちゆう  
 野のびまひなばいと壺洞とう雷らいも切れむかりあらん母君の煩わづらりせあらず  
 迹あと先の程ほどさらふね山やま中ちゆうに進んどべた美み丹たんもあらず。このいのひのあらず  
 ば二個が身の何のとかとべとや。良ちやう路ろ経けいしことなれが我われハ苦きちれ人も  
 めるはどく。しま少時じゆう歩あ行のり右の社れ雨漏りとても美小こ覆ふひちがく

ちのぢぢ。られるとて世よのあれなくとも山やま踏ふりけ谷やを行ハ何地ぢ探たづ得ひとら  
 の村母む至いたるふなど難がたと事のめれとぞ鬼栖せ里りもあれ情の門母は使つか  
 なば母は君のや都志し王の食をとべた飯を惠となん身も俱母は母はの手と携へ  
 せよと姉姫の指さ揮つ母は母は切らず賢くも泣なれ面がこえせは  
 このや母人よ爰こゝ臥ふかば牙も冷ひんぬ我を足も痛いとも泣なれとのえ  
 笑わら日ひ飯を食とべともほげな秋もせはじたゆ急い母も氣あらずとていひせ  
 むへととげまとか睦むつ月づきの方を湧出たれとれ涙も堰止からずとて事乃  
 算あらわるはも足らぬえめて姉姫なり都つ志し王なり斯かく孝かうなれといふ小憂う  
 を増すの事もやと悲しみれれを包とりいれハ甲斐あなれのこといひもい  
 そ是を妻が戯とわり。即今いまと何方かでもともぐいにあらんといはめる  
 勉つと励まわれとらん足の痛いけよく一い足あ歩あ行く二ふた足あにて木の根ね岩い登のぼる

山本スナギキ





山神大元卷之三



山神大元卷之三

二

権持



けと吐と吐息あき 佇止眇昧瞳と坐し。歩行へと氣力も衰へ小鳥と紺衣  
 養もも貝な。移と埒を定めんもせめて感ひ噪猴ハ羽の雪の暗翳を  
 叫び蕭條惆悵として人里へ出さる便極も巧斯く如何のとへことおひるふ  
 適雪のぐれ一木の葉は鏗間より幽子らつと先ハ星の有へと空も有  
 後ハ燈火や若くも骨火の兩雪ふさふさのなんりとし心疑ひ假令賊家  
 みもめれ狐狸の巢穴もせよ一夜の情もわづらんといつと好く歩行近より。  
 のま姑や人家ぞと。賤の家は尙武に親さけまばといふみ丈かかると黒  
 髪を蓬鬆圍炉裏の傍に在る孩児の眩中のの食を奪る。鬼女妖怪や  
 又と瘦衰へ髪もおどろ振乱しこれハ病は月日やをわん人あや且猜疑  
 且怖れ須臾門中佇止動靜を伺ひしが雪を頻々積り両子の身あはしく  
 わづらんふ悲。おひるて免してよと空舎の戸次明させわれハ主の女は声

とし。この大雪中避地音耗をたのむ。狐狸の業うらん。病はかき飯を  
 減らさむ憂。やうく人の情飯を捨て其う浚圍炉裏に焼食せんとすれを分  
 ちへよとの心なれ氣取るがらもらたてのりのやと清きれ声と扱と人あてはる  
 こと瓜倍り。安壽姫都志王丸の子は狭内へよんとせしがきて志はし逆ら  
 くさむかりのりのふゆさむねゆ急ふて市中ハ憚れ者なれば道回へと人  
 も形。固踏迷ふ境もあはけ洲がれ道路の雪はう上り。手も龜足も寒へ  
 いと乱し。暮心かりと軒の端に小竊とも更いとつねとも恩愛うら鳥  
 類はたつて居るを落しめ斯薄命なれみさかひ。手はくくれるの深きまじ  
 杖の意は金五つれるのみ願ふ。おひ。河に主女とれハ血ひ入る人も  
 聖ともまねね病葉の風を勝て寒は思われ甲斐なれ声してお行なる  
 人おひるれも斯雪は山中日夜立のやなめ。夜のりのとこらなる。



らとて飯にものなけども一夜とのし寒は氷凌ごみ人の情の洞  
喜びのふりも形。衣の雪は拂ひてくれつ遠のかくせだ老女の身を  
いづら。こや圃炉裏の元衣乾人か火はけりえし。奥のあねははなれ  
を長え藤路とるは又お方のいとひこそ專要なれといひはば命を  
物に感てす。喜びおはけは悲さにつと忍びがたは涙もくろひ使へど  
も形は遠の深山お入りの。圃所はけりなり食をれもあまの日にかぞえ  
月お指もりても。果をたもなると言なれは困まんより死ん物とぞひは  
かども。かたは深山か情の涙と方のありけり。いう形宿世の縁一母や  
涙おひせびまれは主女と涙を汲。世塵の悲樂を廻れ車のおとく。お方の上  
おのこ命と煩いしくおひ。公弱くては初と両子の為めあつり形人よ火地  
足をのぞきふこそ道をたれし。さうな煩いしれは行つても頼く。焼くおめり

籠もなつれへ薪と俱圃炉裏に焼。さうか食世。残りのたしととも縁火  
おのぐんすて食しむがれやすしれを。睡月の方押戴と世おあれ肘へいご志  
らご。何に食は擽ひるは鐵を凌ぐ。焼くさへ先お子へとあつて毒味風  
味も徒お。こ行世は恨とも盡さくもあつたれど四方山の吐へも  
のけらとらつてると氣を暗さんと打解圃炉裏のたに。涙りし雪の骨と  
爰より。主女戯といれを我おこける。のハ薪をかり形。年毎ふも擽と  
は。せめての饗意おせんとして惜と形。折焚燼主火影おはく。声  
音恰好お。且お至れりて。賤くね方。のいうかおる。の縁由ありて。従者も  
連ぶ。狂しく吟呻もあつ。のいし。よ。病痕も。おれあ。いと。五臟の裏より。  
頃日夜毎ふく。の悪夢お責ら。火焼りて。それと流石に。姥の愚痴  
おら。か。ひ。東雲告れ。鳥の啼。おれ。人。お。か。て。昏。お。を。さ。く。お。の。さ。

山井大志卷之三

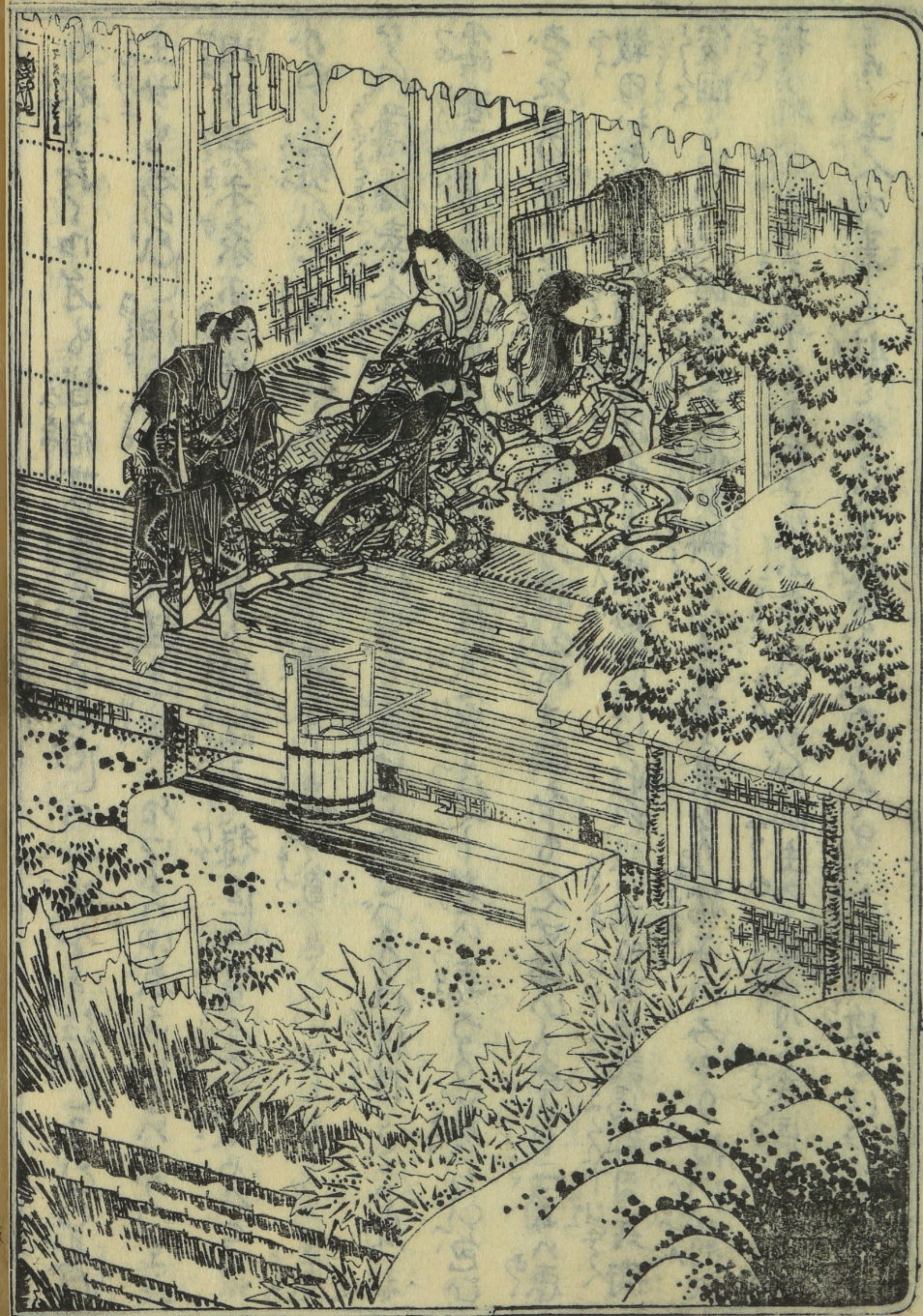
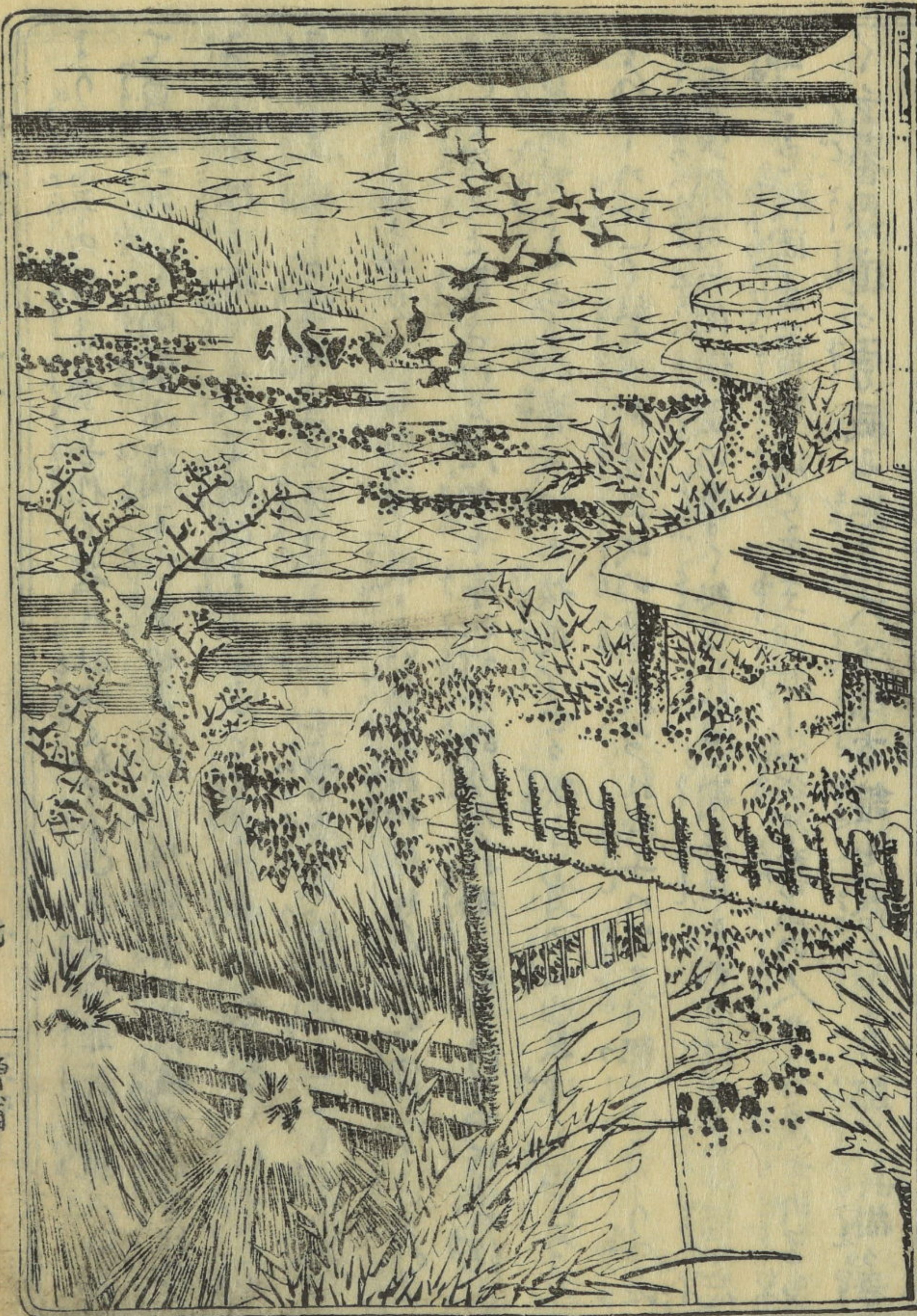
五



へぐ耳みみをたおしたおし連つれつるが身みのんぶんぶたも樂たのむがななく。隠かくは  
 けまがれ方かたのわりわりればればづがらづがらしくしくひひけりけりし小こ警けい木ぼく家けはは強じやう動どうありありしより  
 一日いちにちもも死しななかかつつせせとと耐たもも耐たとと茅かや屋やへへ音ねるるひひままかかそそ公こう形かたはは孫まご孫まごの  
 警けい木ぼく家けははままががれれ方かたににままああららばばややとと同おなじじにに睦むつ月げつの方かた叔しやくとと我わがはは仇あだ  
 ありありの偽いつはりありありけけれれをを此こゝ胸むねののああららままれれ同おなじじとと皆みなくく思おも慮りおおつつて  
 いういう中ちゆうもも薄うす命いのちのの我わがくく。たたままでで不ふ審しんととそそもも理ことわりかかれれ從したが者ものありありけけれれの  
 ちちがが物もの證あかしじじくく人ひとたたががひひままてて從したが者ものとと敵たきのの多おほ勢せうみみ困こまとと遂ついみみんん夫おつとはは杖つゑ  
 柱はしらととももおおりりひひけるける。一ひと個このの焼あぶおおままれれ今いまのの身みのの厚こう情じやう小こ預あづかりりのの世よももやや報うへへたた。  
 警けい木ぼくのの由ゆ縁ゆかりののああららげげれれももううかかへへ人ひとままててははししりり地ちへへももははひひ賞あづか金かんとととららけ  
 得えばば。爰こゝにに一ひとつつのの頼たのりり子こ細ことと這こゝ友とも子このの筋すぢ目めののああららけけのの亂ごななれれどど一ひと度ど  
 家いへのの子こをを連つせせとと。夫おつとのの養やしな育うひひののああららけけがが身みのの代しろりり頼たのりりしし。ああののああららけけをを

ももおおののああららけけのの身みもも皆みな宿しゆく世せのの定さだめめとと。ままじじのの世よ話わををとと注しゆししとといいひひもも厚あつ  
 主しゅ女にょももああののびび。泪なみだもも息いきととももにに溢あふししたたりりののああららけけももつつととに  
 迫せまりり警けい木ぼく家け小こ由ゆ緒おののああららけけのの身みななららばば。証あかしとと。懸かははりり賞あづか金かんとをを求もとめめんんとと爲な  
 りりややとと疑うたがひひをを受うけけたた。ううかかみみ人ひとはは罪つみななくく。妻つまがが貧ひんとといいややししたたららばばとと思おもひひ  
 ぐぐれれ薄うす薄うす素す食じやくとといいふふにに似にせせとと暮くせせとともも。ささぶぶらられれ浅あ猿ざるとといいふふとと思おもひひ  
 露つゆ塵ちりははららのの妻つまもも原はら身みゆゆ急いそめめれれ武ぶ家けはは一ひと者もののの妻つまありあり。羞はづららひひ包かひ  
 ぞぞれれののああららけけもも疑うたがひひ受うけけたた。暗くらいいののああららけけををももととせせははいいとといいふふとと思おもひひ  
 報あやののああららけけもも消き滅めつののああららけけとと懺ざん悔かいははらられれ。警けい木ぼくのの老らうはは託たく馬ば郡ぐん司し兵へい衛ゑ  
 俊とよ國くにとといいふふ人ひとのの令れい室しつのの側かた女にょ柵さくとといいふふのの果はかりかり。孫まご子こののみみぎぎりり被かけけ門かど前まへに  
 捨すてれれ父ちち母ははののああららけけももああららけけ小こ妻つまののああららけけ。兩りやう主しゅのの養やしな育うひひのの成なり長ながとといいふふとと耐  
 よりより主しゅ人ひと大だい事じとといいふふとと思おもひひもも我わがののああららけけ。ああののああららけけとといいふふとと思おもひひもも





山崎九郎巻三

六  
其



傍軍の男子盛喜化といふ壯士とかくいひ其通の罪死す就んす却  
 て黄金以て子へ兩個小竊母亡命せよといひし時。警木家の滅亡近きにあ  
 る。其初と我くよ代に救ひとせよと主君の命に死かすに任りし家  
 居を去退し。俊國どの先見も違はざ。警木家滅亡忘ても主の意を  
 失ふは死と知りてに甲斐なく。散るに落失は行跡知れざるを空しくするは勞  
 うしと潜くと歎とけは。叔と宇和竹が語りたれ柵ありけりや。けふは  
 由縁の姓もあらず。脊以縮め枝足りせる狭き門の上を急ゆく包じたり。  
 かくハ正しく警木判官正氏の妻これるれ。兩子の安壽都志王丸。正  
 氏の正夢郡司兵衛俊國の導く処に居る。斯忠臣もありける。不厚恩を忘  
 却る事。村岡玄蕃要道こそ主に弑し。家以奪めぬの人非人。家士即ち  
 玄蕃要道が勇威も忠と大半味方館を落し。郡司兵衛の妻

宇和竹も養つれ始より。恩に報ふ為とて柵が又結し。黄金より。宇和竹  
 が身も禍ひくら。村岡玄蕃なれぬの手に。柵つれんとせ。又いづく戦ひ散  
 る。多れも麻と負ふ。跡みえは。宇和竹が教ふ。任せ落延し。せ。細やう。小  
 老女の身。れ敵の為。小体も負ふ。れば。今頃。そとや死もあは。ん。不便  
 ごとと歎く。柵黙然として。宇居りしが。何あり。ひ出し。入。竹へ。短  
 刀をとり出し。安壽姫都志王丸。が。手。持。添。つ。れ。と。我。喉。へ。ご。と。突。き。入。る。  
 睦月の方。支子も。縁故。あ。ら。ば。れ。ハ。周。章。あ。り。れ。左。右。より。た。ま。け。い。ら。  
 づ。け。れ。を。左。右。へ。手。と。拂。ひ。いと。く。し。氣。に。吻。く。と。吐。息。し。り。る。ハ。正。氏。公  
 の。怨。敵。の。行。割。正。く。安。壽。姫。都。志。王。丸。の。身。自。刺。ま。へ。孝。の。道。も。な。ら。睦。月  
 れ。方。の。追。育。も。操。も。ま。貞。女。の。鏡。と。照。渡。ら。ん。それ。ハ。其。泉。不。在。と。故。主  
 へ。も。さ。ら。る。も。面。目。が。失。は。じ。て。目。見。す。れ。幸。母。も。お。ろ。く。と。嬉。しく。お。り。

山崎大將書三

七



けり。悔く甲斐なれり。昔を捨子母。古主と親も  
 主人ともおのひはし。ええさぐりの。知れども成実父の姓名  
 説話も羞らるべし。貧賤なれども顔回相似りせば。飲然と飲びなん。位  
 天朝は高く。富貴海内。母益も。傑付相似り。怒氣を表え。  
 今も人の悪。人の好。情。けり。人。母。怒。主。弒。国  
 本妻の娘。女。道。娘。人。女。中。生  
 世。本妻の娘。女。道。娘。人。女。中。生  
 あり。門。捨。跡。母。産。後。の。血。の。ろ。い。て。あ。死。は。し。  
 悪人。母。子。と。お。道。の。知。り。け。あ。や。繁。木。家。亡。び。い。後。家。士。し  
 て。妻。送。ん。と。細。り。に。言。お。れ。も。浮。雲。の。富。貴。と。肯。ん。や。尋。者  
 の。父。り。せ。名。無。連。ん。と。願。ひ。喜。ぶ。べ。音。耗。ら。く。人。と。て。く。悔。る

その詮方もあはれれど。切がれ。血筋。夫故。了。飽。了。夫。離。別  
 自らに自害。も。あり。い。け。れ。と。子。母。又。を。父。へ。公。を。通。り。て。今  
 の。功。を。立。め。れ。と。終。焉。の。障。と。成。れ。の。立。女。報。じ。と。れ。黄。金。よ。り。主。人  
 禍。送。り。罪。滅。せん。母。も。滅。が。の。母。明。し。な。は。敵。の。妻。と。受。納。め  
 みるんか。包。じ。が。害。と。なり。恨。也。我。父。い。し。さ。竹。の。方。と。は。て。の  
 恨。こ。ら。み。て。は。向。方。へ。例。と。此。方。へ。轉。び。狂。ひ。て。終。死。し。け。睦。月。の。方  
 女。子。も。こ。の。光。景。母。涙。を。い。た。万。涙。の。中。れ。一。笑。も。あ。り。い。け。る。や。仇。事  
 と。の。果。玄。蕃。要。道。が。血。脈。を。け。け。斯。恩。母。お。り。い。後。を。知。り。情。あ。れ  
 者。の。あ。り。な。れ。い。う。の。宿。縁。な。り。実。は。世。の。中。の。愛。れ。夢。な。れ。と。い。う。な。れ  
 感。じ。良。ら。ち。卧。詫。と。亡。骸。を。り。納。め。ん。小。も。い。な。を。も。知。ら。ぬ。去。り。も。此  
 は。小。捨。命。と。大。や。鳥。の。餌。食。と。う。い。ふ。を。悲。し。と。娘。諸。も。に。泣。く。も。傍。侍











知れ慈悲の傍りなりとて争ふ所の不孝とされば子にありしたる  
 闇中山路を踏込出くを食を乞ふて子を子の身として食ふは天の  
 罰の涼くくめ。妻女とめまめおぼせめて山へも登り妻木を拾ひ母上  
 の肩にせまらぬ湯など焚て行ると押し縮むひひめれ都志王丸を  
 ともぐ母雪もせよ雨もせよ母上一人と志も中じ我身も傷むは是  
 行多入のく袖に纏り裾に纏ひし母睦月の方を泄る涙小袖と志を  
 いそそ不孝なふ持たばかた歎きとあるべうともおけのぼりた斯五個の子  
 の孝なきも何ぞの祟り母て妻と苦しめれりのうらめ賢愚貧福の生  
 れ因といふふりよ一辨へおしりれ母身もいぬくの苦辛に五病のこし  
 て泣くりの憂れ杖に突つとも家ごとく出くまひ不行つ佇止つあま  
 涙後の姿中と向方母悔は此方お愁ひ振りの跡えおくりとや妻もえへ

はれ山へ登り里へ行こられぬ。

第十二

安壽姫黄金母牙以贖

睦月の方両子も賤の業もいとおく馴とや三年近く星雲次越月  
 日かとなりて父がれ子も育れ母もや安壽姫十六女都志王丸十女ふ  
 かねれ母従ひ最母は事子の孝ありて兄弟の中睦はく好お敬あり身  
 急なりておぼつうおも母せが今日と都志王丸の母が終とも里へ出安壽姫  
 と山へのぼりて薪を折母入都志王丸の肩にたれうらにと急れぬりて足  
 洗ぬ湯なと焚かかたり待たれ耐りか地よりうまけりけん回國の修行者れ  
 僧風窺へ姫の生けと尋常なら次鄙わづじれ容貌母且あやしき志  
 試入とて案内とめ切戸を押し内へ入られを驚たこの何人あておする  
 やと知れをかりくと打笑ひて旅傍りしれと不審りのふわふわうらとぞ



ち後を勞し多ひる。かぞと膳太さりの癖として椽先へ腰うちかけ不意も  
 此山中に踏迷ひいんともなるとさうゆかれば一條の煙として正しく人家を求  
 め小安さかみかせも山間の家入りぶしく珠母牙の鮮明なるに疑惑起  
 了。若くは狐狸の吾が誰とんとあひまやと身の毛堅直し再入れ法華徑  
 一部かぎり有り。かれ尊は法徑が變化のりの疑がたれあふべと。正  
 小変し此亭へ入りぬ。まがくく勞を休められたりふかや。幼めて心を移しけ。あ  
 げぬ團を誰とても踏小まふあ更なり。いとわづらじとりの妾も牙母受  
 のり。さぞ形とおひける。とあふさぶたそのいなくとも。まが勞を休め今母を  
 そのも芽もゆりかんと。申した言葉も族傍つけ入先同とたこのけりり。  
 親子二個の當にこれの傍母田畠もはし何を産業として朝夕の煙を  
 まみふぞや。姫を羞むひ回答もせざりしが漸ありて我も此とち終る産

ち後母もあふ此縁故ありて何とせ山住の身とあおりぬ。いつ果をくも  
 かね。その目く過りれ小も里へ出て飯を乞山へ行くハ薪と折露の命は  
 はるげども足とて女の甲斐なく。親同胞の勞を盗むの罪を妾一位り  
 あれば空おそ恐しくおけふゆゑに経續誦のあましくにも罪障消滅と唱え  
 けりぬと語りけ且ハ族傍と傍りの法にこし。此牙の孝心昊天の加護もあ  
 るされど先當り牙の孝とすれりけりぬ。吾母傍と都の方へ登りあふ。ト  
 悲鳴り長者の許へ伴ひ此牙のこほいと易く。孝行の為牙は黄金小鏡ひ  
 と連身りしといふ。かきんと厚く取扱らん遠く親兄才も呼迎えんハ  
 牙の實と不實との手段ありおん。斯勅ちまのせれハ拐挈人ともおけり  
 てんがさむかりの才發的あふに飾りといひくおけりしゆ急ふこそ妙ハ昔の  
 ばれども縁由は具し説法す。次といふも疑ひ奔れへし我主人と憑こつる







その米穀花子満ち何一不足なればといふのはしといふも。まじらば頃日と申  
 弟と同胞年季の娘を禍ひの降るる進退さるるね此禍ひを避ん  
 と心身づゝの児女をして傍に置て罪を贖ひるが心身を固愛娘の禍  
 災避れしゆ金百両を送りて其人と賤つんと諸國へ人を走らせ  
 捜し求めさといふ。黄金一こなへせ心身の汚れを洗はれを勧め  
 にあつと。丁寧の黄金を包み懐中かきおれども親同胞の為か  
 一度も別うとも二度はひえなは俱に飲樂せし此上やあふんと  
 母速されど今も賤しれ業も深り。数多の借金も返済せしむる母人  
 へまわらせぬが勞がせれも余所非なり。朝夕の飯もおろさしに食する去  
 を迎兩個の兄弟右と左も樂しみ。憂難も忘るるは。母妻が足へ  
 ばはさぞの歎と悲しみむん。これも不孝といふし母上もさうおは。何

へ。人こそ道うらめと。猶豫もなれまは悟りしれと。心身母のゆり  
 待。事や受せんといわれざるも不可なり。母も結るものうらめはか  
 此ことなればか。されど孝も似て孝もあらず。所謂名聞の孝なんめり  
 責けしは。何れも親兄弟のまこととせし。まはあつて形もいふも  
 を贖む。母人へえはぐさる黄金を贈るれば叶ひなは。残りれ業もは  
 いふれど。心も角はれよれ母をかひてんるが類あかり。是れもいふれ  
 母身が呼送ゆるの契約なれば約定なりけし。旅人快く肯ひ孝母を  
 道理も人忘れし。の教も安さる難さるのなれ。母。叔く心身の稀成  
 孝人なれ。まとい我々が斗らひま。とも天の恵その流く用運のりて福の  
 事とていふるは。いざや黄金をよめ。と又懐中より取出し。こめびる  
 村と年とせし紙小包をば。涙しわ。世におれ。附と尚黄金もいふ

山崎大徳巻三 十四 増補









山崎天来卷之三

十一  
山崎天来



山崎天来卷之三

十六  
山崎天来



皆入へられども心聖のなれど支の下りも定まらぬ。斯てらと氣がたづな續  
 おくく小母君の艱難くるお忍びぞ朝夕慷慨ありひの終回なれ母の情の  
 人の訪ひくいと細中うなれ教母はうせ情のれ方へ行しと縁由は詳らふ  
 書加へ悲しくおひまらんが妻とても一敏痛をなれど泣くは定へはら  
 せんとの聖な物米と憑ふ先別とすわらすれ別もなれ賤の業も聖より入  
 山と里との勞したも免えんぬもと黄金百両ふ身を贖ひ陞し置まわ  
 らされ迎への人とあめしと小待まぬ願うなり。母人は都志王丸へと去殘  
 と續てのなげれ驚かして入。深返しても泣流とかは因果の積まはる  
 いろな前世的の報ひや。かく浅穢した業も露の命に繋ふごとくも  
 ざるもどくも初め門下停止とも。か海をえんとなとて羞むく定しく過  
 れを呼戻され漸く情の飯を受。二とびと度とかさなりて。面がさくまも

羞しせむと邪見の門のりりもども飯やんんとまきし後。胡乱的者ぞ連  
 めらくしく恥め所受れのもの。兩子の為の辛苦ととくへハ苦もせざりし  
 一住缺てその貧令も何うせん。と投下ければ身裂二ツ割うれと都志王  
 と取のげて爰のいう母。此紙の中なれ黄金とのとかりひけるに。貧令ふ  
 こゝろなかりしと父。睦月の方のと紙。付たわらば拐挈さばしりのなれぬ  
 じしや我姫の孝れ道として一圓ふかりひ。拐児の伴と実とかりひ何地へ行  
 けるその悲しや。安壽を戻せかへせ我姫と浮岩様ひね乱し出し先も  
 定まらぬ。都志王丸とわれあもあられぬはし母を慕ふて出ゆね。

山排大夫采枯物語卷之三 畢



